

ミステリ読書案内

2023. 3. 13 発行元

第456号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

かつての名作・傑作 その5

446号に続いて1970年代～1980年代にかけての作品の中で、私が数冊しか読んでいない作家の傑作、名作と思われる作品を紹介している。忘れられつつある現状を少しでも回復するために…。

江戸川乱歩賞受賞作品

1970年代の登竜門は江戸川乱歩賞だった。乱歩賞は1955年にスタートしたが、新人作家になったのは1956年の仁木悦子から。1980年代までの受賞作品の中で、私が読んでいないのは多岐川恭の『濡れた心』、新章文子の『危険な関係』、戸川昌子の『大いなる幻

影』、佐賀潜の『華やかな死体』くらい。若い頃の好みの問題かな。ただ、当時の受賞作品のレベルが高かったことも事実である。それなりに傑作、代表作が並んでいる。

最近は新人賞が増えずに乱歩賞受賞作品もその多くは読んでいない。現在のミステリ出版点数はあまりにも多すぎ。とてもとても読み切れるものではない。

矢作俊彦「凝った死顔 マンハッタン・オブ」

1985年光文社文庫。『ニューハードボイルド』と銘打たれていて、この『マンハッタン・オブ・シリーズ』は本書の後、『笑う銃口』『はやらない殺意』と続いていく。光文社文庫初期の頃の目玉商品のひとつ。シリーズの続編は角川文庫から出ている。その後ソフトバンク文庫になったようだ。矢作敏彦と言えば後年の『THE WRONG GOODBYE』が名作だが、その紹介は別の機会に譲ることにする。

登場するのはニューヨークの名無しの探偵。表紙の絵にはトレンチコートを着て手には拳銃を構えてという典型的なスタイル描かれている。「タフガイではない」と言いつつも、依頼人を始めとする周りの方がそれらしい行動・展開に持って行ってくれる。テンポのいい短い文。鋭い会話。理屈抜きでどんどん話は進む。時には探偵の方が事件に振り回されることも…。一冊に十話と息を継がせぬスピードで回転していく。題名は英語表記。『YOU DO SOMETHING TO ME』『YOU'LL NEVER KNOW』…。日本の読者が思う「ハードボイルドとはこういうもの」というイメージは存分に発揮できていると思う。「正統派」としての側面もあるが、チャンドラー好きとしてはもう一歩…。

長島良三「ドラフト連続殺人事件」

1984年リヨン社(発売元は二見書房)から出た本。その後他社からの文庫本などは出ていないようで、古書市場では比較的高値が付いているようだ。三万円はちょっと大袈裟だが、3000円～4000円くらいはするようだ。

作者の長島良三はシムノンの『メグレ警視』シリーズなどフランス文学を訳している有名人。その人が書いたミステリが本書。事件は身に覚えのない畏から始まった。開幕から一か月後くらいの頃、プロ野球球団東京キャッツの監督・進藤敏彦は球団オーナーに呼ばれ、ある女性に暴行をはたらいたとして訴えられていることを告げられる。相手は顔見知りで、確かに会ったことは間違いないが、そんな事実はない。これを聞いた監督の娘・万里子は探偵の役目を買って出る。万里子はシングルマザーで、かつての恋人・木崎純平に助力を求め、調査を開始する。木崎は出版会社の編集の傍ら関係者の間を動き回ること。ところがこれが連続殺人事件に発展し…。

「野球ミステリ」とは言うものの、ペナントレースの状況が少し描かれているくらいで、後は球団を取り巻く人間関係に重点を置いた展開。

大谷羊太郎「殺意の演奏」

1970年講談社。江戸川乱歩賞受賞作品。大谷羊太郎はギターの演奏者からスタートして芸能プロダクション関係の仕事をしていたので、本書もその流れに沿った内容と言える。私は十冊以上読んではいいるのだが、この『殺意の演奏』が一番の出来で、他の作品はどれも小粒のものばかりに感じられる。トラベルミステリも多数書いている。「本格もの」の味を出そうとトリックも設定されているけれども、探偵役の人物像を含めて印象に残るほどではないのが惜しいところ。

「序章」が長い。大阪で芸能ショーの司会者の仕事をしてきた細井道夫(芸名)という人物が亡くなった。密閉された室内でガス中毒で死亡したようなのだ。部屋には遺書めいた文章が残されており、暗号文のようなものもあった。警察は自殺と断定し、捜査を打ち切った。この後「第一章」が始まる。事件の5年後、放送局のアナウンサーになった細井の弟・杉山真二が残されていた暗号を疑問に思い、再調査を始める。手伝ってくれるのは以前学生の時、局にアルバイトに来ていた高岡妙子。この後、ドアの掛け金の図や殺人の起きた部屋の俯瞰図などが呈示され、謎解きを楽しませてくれる。メインは暗号の二重構成になっているところ。